



対州馬との農作業の様子(昭和40年頃) 写真提供:大江正康氏

これからも私たちの大切なパートナーとして



日本在来馬の対州馬は、対馬の人たちの暮らしに寄り添って生きてきました。私たちの暮らしが大きく変化した中で、対州馬のあり方にも変化が生じています。対州馬のこれまでの歩みを振り返り、これからを考えるヒントを探します。

幼稚園での対州馬ふれあい体験

「馬」は、人類のパートナー

馬は、今から4200年～4700年前、ロシア南部で家畜化されたとされています。以降、耕作や荷役、移動手段として使用されるなど、人々の暮らしを豊かにするためのパートナーとして生息してきました。

日本では、モンゴルで暮らしていた馬が、古墳時代に朝鮮半島を経由して伝わってきたと考えられています。1500年ほど前に有力者の墓として日本各地に作られていた古墳の中には、馬の骨や馬具が収められていたほか、馬の形をした埴輪が置かれていることから、馬が、その時代の人たちの生活に大切な存在として扱われていたと考えられます。そして、その頃に対馬にやってきた馬が対州馬の先祖だと考えられています。



今城塚古墳（大阪）に祀られた
大量の馬の埴輪



日本に古くからいる在来馬と対州馬

大陸から日本各地へと広がった馬たちは、それぞれの地域で繁殖しながら、その地域や仕事に合わせ、特徴を変化させてきました。現在8種類の馬が日本在来馬として残っていて、その中の1種類が「対州馬」です。

対州馬は、遺伝的に日本在来馬の中でも、比較的モンゴルの在来馬に近いということがわかっています。また、考古学的には、九州北部が国内で最も早い時期に馬にまつわる出土品が確認されていることから、対馬に渡ってそのまま生息した馬、または、九州北部へ向かったのちに対馬にやってきたのではないかと考えられています。

対馬の自然と人々の暮らしに寄り添った対州馬

対州馬は、険しい山道の多い対馬で生活するために、蹄や脚など体が丈夫なことが特徴です。また、小柄で温厚な性格は、女性や子どもなどにも扱いやすく、対馬の人たちは、対州馬と一緒に険しい山の中へ入り、荷物や人を運んだり、斜面に作った農地を耕したりする動力源として大切にされてきました。多い時には数千頭の対州馬が島の中で飼われていました。



藤崎利明 著『いくさをいきぬいた村』より

かつては対馬の多くの家で飼われていた

江戸時代の対州馬

江戸時代の資料が多く残る宗家文書によると、藩主や家来など、武士が使うために「牧」といわれる牧場で飼われていたことがわかります。

また、藩が持つ馬を各集落に預けていたことも資料から読み解かれることや、現在の対州馬にはない色の馬がいたこと、父親や母親がどの馬なのかを記した箇所もあり、歴史を知る上でも、生物として知る上でも貴重な資料です。



御牧馬并二御預ケ馬帳



長崎県対馬歴史研究センター所蔵

時代とともに変化する対州馬と人々の関わり

生活を支える役割の終わり

対馬に生きる人たちにとって、生活に欠くことのできないパートナーだった対州馬ですが、60年ほど前、自動車社会の到来や作業機械の導入に合わせて、対馬で対州馬は数を減らしていきました。対馬の家々で飼われていた対州馬は減少していき、荷役や観光用として島の外へ出される対州馬も少なくありませんでした。明治時代には4000頭以上が生息していましたが平成12年には30頭以下になり、在来馬の中で最も絶滅の危機に瀕した馬と言われるようになります。このような状況を受け、対馬では昭和47年に対州馬振興会が発足し、対州馬との新たな共生の道を模索する取り組みが始まり、平成23年からは、対州馬保存会に名称を変え、対馬市と共同で、対州馬の保存・活用に取り組んでいます。

令和3年には、島内の農家で飼われていた唯一の対州馬が、対馬市に引き取られ、対州馬と私たちの関わりが大きな変化を迎えています。

対州馬がもつ新たな役割とは

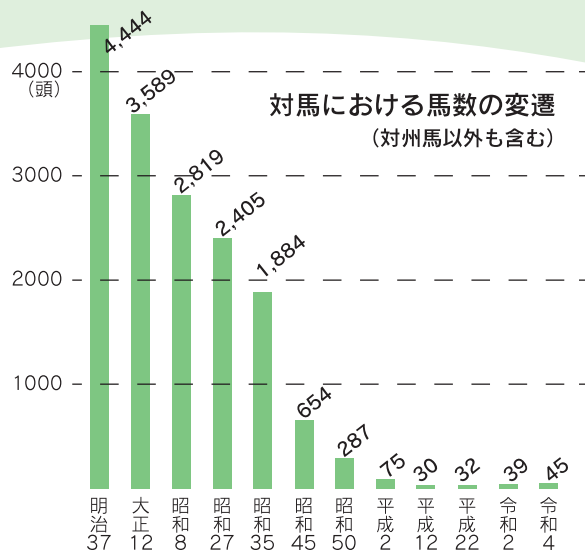
現在、島内では、目保呂ダム馬事公園（上県町）のほか、東横イン対馬比田勝（上対馬町）、あそうベイパーク（美津島町）などで飼育され、見学や乗馬をすることができます（乗馬は一部のみ）。30頭以下に減っていた島内の対州馬も、少しずつ増え、現在は46頭になりました。また、対州馬と人との関わりを作るため、背中に人を乗せることができるよう、調教を行う機会を増やしており、対州馬に新たな役割を与えるための取り組みが進んでいます。



目保呂ダム馬事公園



田中 絢子 調教助手



飼育していた阿比留三郎さんと対州馬の千里



子孫を残すだけでない、新しい役割を馬たちに

対州馬が物凄いスピードで絶滅の危機に瀕したのは、急に役割を失ったことが大きな要因だと思います。現在残っている対州馬の多くは、人を乗せる訓練を行っていないので、子孫を残す役割しかない状況です。調教を行って、多くの人たちと対州馬が触れ合う機会を作ること、私たちが人間にとって大きな経験になると同時に、対州馬にとっても新たな役割を与えられることだと考えます。

対州馬を知る・触れる・深める

馬との関わりが歴史的にも深いヨーロッパでは、馬と関わることで心の安らぎを得る「ホースセラピー」が注目を集めており、小柄で温厚な対州馬にとって、人々と共生するための新たな役割となることが期待されています。現在、対州馬とのふれあいを通して子どもたちの情緒を育もうと、島内の小中学生を対象にした乗馬教室を定期的に開催しているほか、イベントでの乗馬体験などを行っています。

また、島外の動物園で対州馬が飼育されている縁から、その地域のことや歴史について、子どもたちがオンラインでつながり、馬についての学びを深めています。



乗馬教室では、乗るだけでなく世話も行う



対州馬でつながった仙台の子どもたちとオンラインで交流



比田勝小6年 細井 和花 さん

もっと対州馬のことを知って触れたい

お母さんに連れられて、小さい頃から対州馬と触れ合ってきました。人懐っこい性格でとても可愛い動物なので、もっと触れ合いたいと思い、対州馬少年倶楽部で活動するほか、定期的に馬事公園に遊びに来て、馬房の掃除や馬の手入れなどのお手伝いをしています。

今回の仙台との交流は、対州馬が対馬だけでなく、いろいろなところで活躍していることを知る機会となりました。これからも対州馬ともっと仲良くなって、将来は対州馬の調教師になりたいと思っています。

色々な方向から対州馬の魅力を知ってもらいたい

中屋：在来馬は、人や地域に根付いて暮らしてきたので、人との関わりが濃い生き物です。人と人との間に對州馬がいて、人間同士のコミュニケーションを手助けできるような役割を、對州馬が担えると良いなと思っています。

吉原：對州馬を次の世代に残していくためには、飼育するというハード面の整備と、馬を現代の生活に身近に感じてもらう場を作っていくことが必要だと考えています。これからも様々なアプローチで對州馬の魅力伝えていきたいと思っています。



島おこし協働隊（対州馬保存・活用支援）
吉原 知子 隊員 中屋 桜 隊員

対州馬について詳しくは！



対州馬保存会
ホームページ



YouTube
チャンネル



Instagram

9月18日まで
開催中！

対州馬のこれまでとこれからをもっと詳しく紹介しています

対馬博物館企画展 「対州馬展」



詳細は、対馬博物館
ホームページで